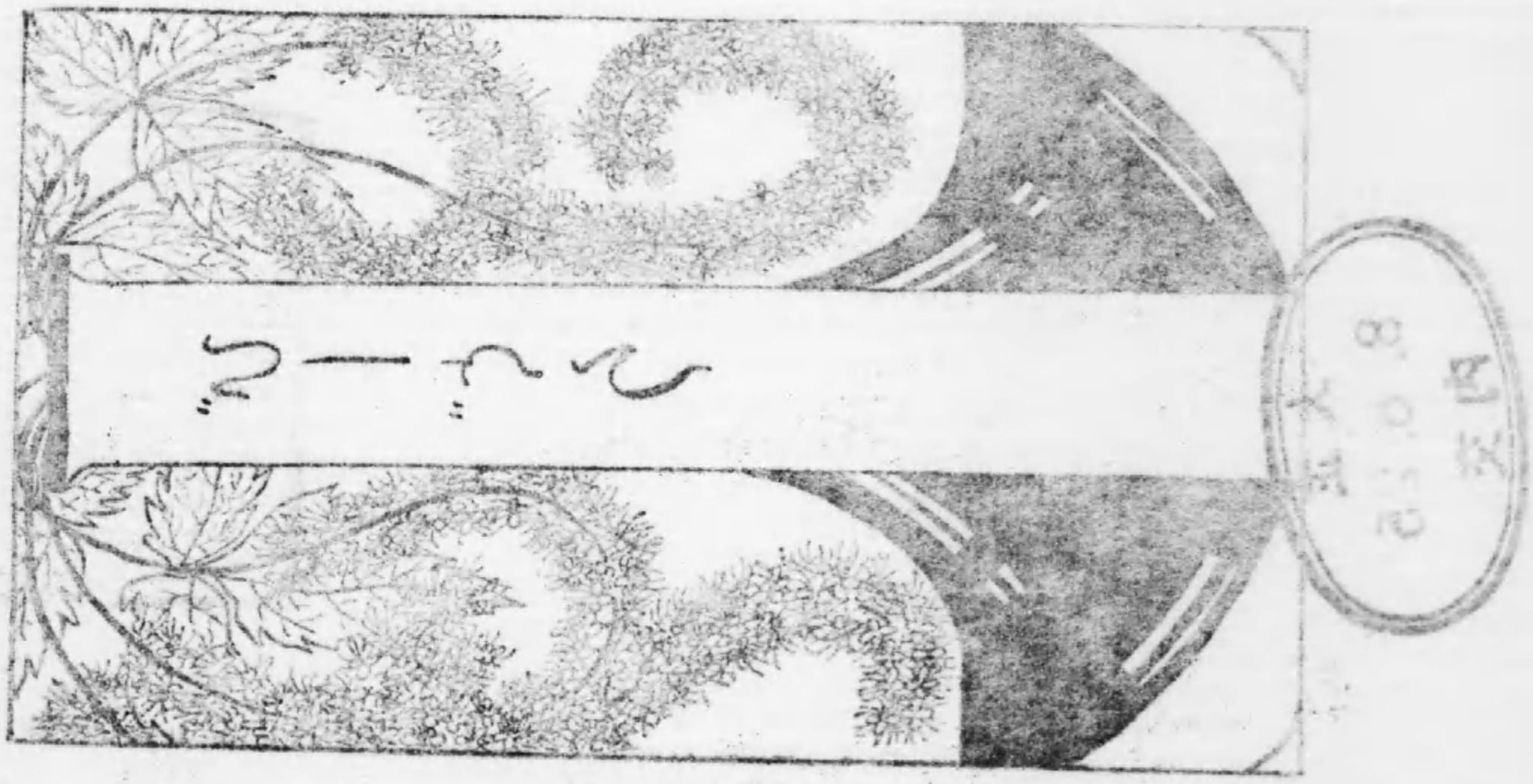
特110
30




東京大学
8.0.12

この私の貧しい教授のために
『びーどろ』に寄す
を贈られた、隠れたる
詩人三石勝五郎氏
表紙絵、扉絵をめぐまれた
郷土の知人、畫家神津港人氏に
深くその厚意を感謝します。

やわんも

# 『びーどろ』に寄す

元茂君よ、
同じ故郷は信州南佐久郡青沼村に生れた。二人の生れた村は信越線が碓氷嶺から軽井澤の避暑地を走り、浅間の山麓小諸驛を通過するが、同驛を起點として南に走る佐久鐵道五里許の所にある。
あの雲の白いちぎれが眞青な虚空に飛んで、高くがつしりした峯を訪ひまはり、千曲の冷めたい銀色の奔流がせせらぎかはして佐久の峽谷を北へ走り、その流れを裾にめぐらして氣短かな鶴頭の淺間が突立ち、今も時々大氣焔をあげて、その噴火に郷土人の若い胸の血をそそる。
信濃よ—そこで君と私とは生長した。
高山植物の白い小さな花々が天界を縁どり、峽谷には深い慈母のやうな自然が太古のまゝに保存されてゐる。そこへ文化の潮流が入りこんで、あるものは虐げられ、あるものは踏みにじられて了つたが、君よ、私共が生れた村の千曲川邊には昔のまゝの名も知られぬ若草が雪解の風中に芽を吹き出し、黒い土をもたげて春は蘇生した？その土の香に酔つて、二人は影と姿のやうにさまよひ暮し、何も考へずに赤のつぺーの丘にかつこう蟲を掘りさがし、土手日向にふきんとうを摘んだ。向山に山鳩の呼ばはる頃、山裾を分けてうつぎの笛を作り吹き鳴らしたのも遠い記憶に殘つてゐる。

それはある初夏のことである。

君と私とは學校の歸りを南へ走る甲州街道に沿うて歩んだ。午後の照りつける太陽をあびて額に汗がパラパラして來ると、街道の向ひに輕い旋風が起つて、謎のやうに砂埃をあげて行く。その謎が白鷺の一團にうち當つて消えたかと思うと、そこには林檎の畑が若い者の心を誘つてパッと明るい光線に反射する。この一廓が君の住家で、

「りんごを上げるから僕の所へあそびに行かないか」

と、君の眼も私の眼ももう燃えてゐる。私が君から二つ三つのりんごをもらつて、君にさそはれて千曲川に水浴に行つたのはそれから間もなかつた。いつも君が水あびに來るといふ神明河原の急流は青く冷めたく嚙つて堤防の長い石垣に來て突きあたり、枠でたたんだ一團を白い波頭でガミガミにしたかと思うと、淵は再び波をかぶつて忙しく流れさつてゐる。川を隔てて洲が見える。月見草が黄金色に眠り、きりぎりすも鳴いてゐさうな砂原には、小さい足跡が出來てゐる。小供等が水泳ぎに來た印だらう。陽はじりじりと照りつける。

「君泳がないか」

君は私をすすめて裸體になつた。ザンブリ枠の上から飛びこんだかと思うと、急流を上手に切つて譯もなく洲に着いた。

「君も來ないか」

君はさう言つて燒砂の中に腹ばつて足ばたをする。私は泳いだことがなかつた。同じ村に生れはしたが、君の部落より少し離れて東に見える山手に育つて、私は川といふより出そのものの中にゐた。枠の上に立つて恐怖心に驅られながらも洲の方をうらやましさうに見てゐると、君は、

「どうさもない、泳いで見たまへ」



と、ぞんざいに言うて足ばたをつづけた。私がはだかになつてあの急流に飛びこんで了つた無鐵砲よ。一直線に月見草の咲いてゐる洲を思ひつめた單調の頭は、今や、早瀬に揺れて助かる術もなく夢中だ……

私は飛びこむと同時にさつぱり泳げなかつた。兩手で忙しくもがいて見たがずん〳〵押し流されて了ふ。私は頭さへ水上に少しも出すことが出來なかつた。流れつつ沈んでゆく—

水を呑みこむまいとあせると呼吸が苦しく、苦しいので水を呑んで了ふ。再び手足でもがきだしたがどうしても沈んで了ふ。もう疲れだして、そのままに流れてゆくと、空の紺碧が映つてゐて、どうどうと流れさる水聲の中に、非常に靜かな茫然としてただ白く青い世界がある。私は運命を自然に任せた。幾分時間死んだのだらう？

やがて宙ぶらりんであつた足が何かにさはるやうに覺えて、私は遂に淺瀬に浮び上げられた。見ると、藪科山から流い夕陽がさしてゐて、あたりには誰一人居る影もなく水面は黄色くたそがれてゐた。

君よ、

ほんたうに可愛い君よ、

君は私の見えなくなつたのを見て恐ろしく逃げ歸つたと後で告白した。助かる運命なら君が居ても居なくても助かる。水の弄ぶままに私の任せたのは自然であつた。君の逃げたのも恐らくあの時分の君の立場として自然だつたらう。

元茂君、

それは私が十八の時と記憶する。私共二人は未だその頃は別段靈肉的に交はる程の關係にはなれずにゐた。が、こんな

事があつても二人は決して敵になるやうなことはなかつた。君の性格も私の性格もそれを默許するやうにできてゐた。そして二人の交りはつづく。

私が早稻田時代と思ふ。それも夏のことであつた。私は休暇で歸國し、離家の一間を占領して谷川から吹き上げてくる涼しい風をあびながら古机に向つて、詩集に熱くなつてゐた日の盡ごろであつた。君は私の家のある山日かげの裾道を通つて霜の桑を摘みに來たのであるが、私が歸省した事を木戸先で聞いて、桑をいつぱいに詰めた大笊を負つたまま、

「オイ、歸つたか」

と、呼びかけてテクテクやつて來た。君は笊を下すと汗を拭つた。神聖な勞働の輕い疲れと休息!!!

何たる慰安だらう、君は仕事着のままどつかり上りこむと、

「夏は田舍の方がいいだらう、輕井澤ばかりが避暑地ぢやない、淺等の山や川は凡てが青葉で輝き、凡てが詩だ……」

と、謂れるやうな大聲で話し合つた。それをきいた隣家の者が喧嘩だらうと言つてさへ立聽に來た。二人は全く感興に酔られて、何時、夏の長い夕陽が落ちたか知らなかつた。そして何も忘れて語り疲れ、ぐつすり眠つて眼がさめかけた時、誰か來て戸を叩いてゐる。起きて見ると、それは君の所の番頭である。何うしたのかと聞くと、昨日から、君が歸らぬので出へ行つたまま、病みでもしてゐるだらうと母の心配、前夜は番頭ともう一人とで提灯で畑中を探し廻つたが遂に行方が知れぬので方々たづねて、やつと此處にゐると解つたんだといふ。私は、君の家の人達にすまないことをしたと思つたが、君は平氣でゐた。君は番頭に桑を負はせてやつて未だ歸る氣にもなれず、森から鳴きだした涼しい蟬の歌をききながら青葉の上にとびゆく雲を眺めて、かたりつづけた。

此のことあつて以來、君の家では私等二人のことを大部もてあましました。

あのほゝけたやうに長くしてゐる君が髮には、兄か父の被り古した恰好惡い冬帽子が着いてゐることもあり、私も着のまま町から山から氣の向くまゝに空腹も忘れて二人で歩んだ。私の丈長道人にてんつるてんのお化姿も可成り無作法に見えたらうが、君は着古した羽織にあるかないかの紐を小さく結び、頬のほんのり紅い眼の碧く澄んだ、元氣のよい身體を今日もぶらりとして運びながら、相共に聲高く眞情の發露するまま眞面目に、皮肉に、滑稽に世の中を觀察した。

「あの人は一體どうなるだらう」

この奇態にも同情ある言葉は、田舍の忙しい收穫時にさへ口やかましい嬢達の喧つぶしに、都合好い話題を與へ、いくらか藝間のある筈の先生樣にも疑問の種子を蒔いたに不思議はない。が、家庭といふ塔内に壓迫されて育ち、剩へ、私といふものに遠ざかるやうに強ひられた君が、反つて私を誘ひだして山川の逍遙に幾時を費し、ともすれば私の生活を改善せしめた位朝夕私につき纏つたのはどういふ譯か!!!

君は山國の少年が夢むるやうに、遠く嶮越えてとぶ雲の行方に海の旅路を連想し、燃ゆるばかりの若い心は躍つて外國の名も知らぬ街々に、夢遊病者のやうな生活に魅せられもした。が、君は病身の兄をおいて決然出奔することも出來なかつた。そして一風變つた君の性格は鄕土に話相手をする友人さへ他に求められず、不滿に不滿は重つて年幾つを加へた。君がだんだん自覺しかけた時、周圍の待望とはますます反對に、君は先づ君自身の生活を知らなければならなか

つた。そして君を圍む堅固な城壁に、久しい習慣性の苔をはがれて眞に活きんとする青年の心の突貫に破られ、君は自由に自分の天地を開拓すべく運命が祝福された。君は先づ私と交つて何を與へられたか、如何に活き、いかに人生を考へるかに就いて共鳴を感ずる二つの心の持主が、全く物質上の利害關係を離れて相觸れ合つたに不思議はなからう。よく、君と私の心は合つた。私が先に立つて行く時、君は私の從者であり、私が好きに物を考へる時、君は沈默を守る。私と君とは同じに貧し、同じに農、同じ種類の讀書に朝夕を送つた。其間お互に何の秘密もなく、我儘な二人がよくもこれまで交つて、何も默認してゐられるかと思ふ。君、これには人間の力で察知することの出來ぬあるものが永久に斯く運命づけられてゐるのではなからうか。

君と私との影が。

あの生れ故郷の石塊路を下駄でかきならし、かなり長い間「社人よ、低腦者よ」の無智な冷笑を蒙つたのも無理ならぬ事である。生活に不自由でない君の、花のやうな純白にして美しい憧憬は、一生懸命に家事を思ふといふよりも先づ自然の風景を讃美し、人事のはかない哀愁と、夢の如きロマンチックな生活を送り、私は私で、早稻田の英文科を出ると高原へ歸つてトローの「森林生活」を愛し、ただ自然の懷に沈默して了つた。何故君も早くから妻でも迎へて皆んなからほめられるやうな、家のためにも亦隣人に手紙でも書いてやつて、いかさま村での調法者になれなかつたらう。私でさへ、義校を出たら眼も惡くないのに金縁の眼鏡位は伊達にも買つて、月給取になりすまし、年に一度位は郷里の石塊路を偉でもとばして歸つたらどんなに郷人の羨望の的となり、もう立派な妻君位は迎へられて幸福だつたらうと思ふ。けれど



も、君も私もそれには滿足が出來なかつた。君は、どうしても家を出切る譯にならず、人からは何の心配もない呑氣者に見えるが、君の心中は絶えず束縛せられ、その鬱憤は君を讀書へ、文學へと惹させた。私も「幸福人」と、友人から書はれてゐた。が、家庭には幾母の關係もあり、父に對して蜜のやうな恩愛を感ずる裏面には、針先で突かれるやうな冷めたい情緒がもつれて安心して家にも落付けず、長兄として遂三十二までも放浪した。

懇しい涙……

それは又幸福のことか、私は郷國に歸つて了うと、袋の峽谷を東西に放浪した。その疲れから村の隣家へ歸つて來ると秋さびしい風が裏口の桑園をがさこそさせて、全く落葉した桐の突先にはとんぼうの羽が躍り、西山に夕づく陽が高原の淀んだ空氣に餞へ、そゝと鳴いてゐるこほろぎあはれに、一人誰も居ぬ間の古机に靠れて泣いた。其時、

「オイ、居たか」と、よく君が來た。

慰安者よ、

定飛ない私が郷國から追はれるやうにして、朝鮮へ旅立つたのも、秋雨が悲しく降りそゝいで、佐久の峽谷には見慣れぬ氣まぐれ雲がとび、あてどころもなく走つてゐる石塊の街道は落人をして何處の果てに身をつなぐべきやに思はせた。私は度々立佇つた。眺むれば幼時から變らぬ山河である。落魄者よ、汝は今なす術なくして自ら郷土を辭す……。

誰一人見送る友もなく、誰告ぐる者もない。斯くして二十有餘の青年は遠く旅立つた。其夕べガタ汽車に身を投じた私は、遠く玄海の波頭を蹴つて、新植民地へ向つたのである。連絡船が釜山港の桟橋に横付になると、初めて見る朝鮮の間の黄色い山の半島、その港町の白いチゲクンの間にさすらひの孤客は交つて、異國情調のさびしい生活に第一歩を踏んだ。

私が旅に病んで再び郷國に歸つた時、誰でも私を顧る者がなかつた。が、何時も變らぬ心で愛撫してくれるものは自然ばかりであつた。私は沈默の底に身をちぢめて全く別世界の人になつてゐた。そして一心詩作に没頭した。其時、私の寓居を訪れて慰めてくれるものは、毎朝のやうに鳴く軒の雀と、山の太陽と、夕べに戸を叩く、

「オイ、居たか」の君とであつた。

君よ、

夏の涼しい私の離家で過した思出も殘るが、秋からかけて冬の枯れた山麓の落葉を踏んで神秘な高原の空氣に浸り、山の鱗泉宿を訪ね廻り、又は火も消えた離家の炬燵を寒中の夜に守つて、曉近く哲學や宗教を語つたこともある。又それは雪降るダー私は、一人居の孤獨から君を慕つて一直線に君の家へ、家へもよれず木戸先から呼び出して、二人共足袋もはかずにしよぼしよぼと、くらく重たい道を南へ赤い灯のともる花街へと、蝙蝠のやうに羽織を被つて吸はれて行つた事もある。其後、私は或は上京し、又郷土へ戻つて君と二人で雪の旅路に縁を語り、幾度目かに私がやつと一定の落付を以て都會生活に入る迄には、淡い作らも可成に痛ましい生活問題に面接してゐる。私が現實の生活へ眼醒めると共に、



君も亦進行して今日の生活を考へ出した。ともすれば、氣取屋でもあつたらう高くとまつた二人の生活は、見違ふた者のやうに嚴肅に人生を考へ、先づ自分達の足下から出發し直した。

「びーどろ」に集められた君の詩は、

ここ一二年間の收穫である。君が詩作に志した動機と影響とが私にあつたとすれば、私は、今、此の詩集を公にする機會に接した喜悦を君と共に否寧ろ一層深く感ずる。

此の七十餘篇の詩は、多くの都會詩人が弄ぶやうな西洋の飜譯でもなく、今日のパンの爲めに原稿料をあてにしたものとも違ひ、机の上で書かれる代りに、君が田園に耕し、高原に木を伐り、薪を飼ひ、豆を播く暇に鉛筆や筆で即興的に、君が一日の斷片として書きつけられた生れたままの作品である。

かの澁く重い情調を味ははんとする人には、之が餘りすつきりした美しすぎる感情と、輕いメローヂアスな形式がつゞくので失望するかも知れない。又、深刻な生活と、高い思想を求める點に於て、同じく飽き足らないか知らぬが、靈の如き錯かな繪卷物に髣髴し、夢幻の世界にあこがれた青年の血は、萬人の胸壓に一度は脈打つて流れる若い響であり、快調なトーンに酔うて現實を離れた生活に躍動する心のおののきにも亦藝術の實がなり詩の花がかをる。

此の農詩人—高原詩人が、蒐んだ「びーどろ」一卷は、かの雲の見舞うてゐる山土の匂ひと、芳醇な自然酒の味に充ちて、

よくも思實に生れ故郷の山河を歌ひ、赤い夢の國から綠色の現實生活にやつと眼さめた驚異と言ひ知れぬ寂寞とを感じさせてくれる。輕い皮肉のあるのも、新うした詩人が孤獨の境地から、社會を冷眼視する反抗の叫びであらう。よく自然のあるものの胸を摑んで、生くる生命のリズムに詩人の犯されざる鍋舞臺と權威とを占むる。

而して、今年正月七日に、三十九の惜しい年齢で先立たれた兄君に捧ぐ可く、この自由詩が君の二十年代を飾する最高の記念塔として、どんなに私は君のために意味あることと歓悅の胸が躍らざるを得ない。

一千九百十九年四月

東京にて

三石勝五郎



色彩に脅かされた心の形式……一
貧しい心……三
パツタの死……五
雲……九
紫の炎……一二
廓の墟……一四
源五郎……一六
女……一九
もろこし……二一
灰色い想像……二四
流るゝ……一八
午後の疲勞……三〇

彼等の一團……三三
卵……三七
やつれた戀の夢……三九
墓……四三
すゝき……四五
螢　螂……四七
こがらし……四九
さゝやき……五一
戀……五四
さびしみ……五六
黒い言葉に聽える赤い音樂……五八
人生……六〇
高原……六二
のゝうえ――……六四



朱に燃えて……六七
湖……六九
田園の心……七一
蜘蛛……七三
緑の初戀……七八
月……八一
小豆……八四
佛……八七
曙……九〇
蚕……九一
和蘭陀苺……九三
滅びゆく馬鈴薯の畑……九五
カナリヤ……九八
たがやす影……一〇一

星……一〇四
壺へおちた蟲……一〇七
芽……一一三
體臭……一一四
びあの……一一六
甦生の惱み……一一九
秋……一二一
瓶……一二四
螢……一三〇
芹……一三一
勞働……一三三
煙……一三五
七葉樹……一三八
へ……一四一



たそがれ……一四三
梟……一四五
骨……一四七
株式會社……一五〇
虹……一五二
葉……一五五
霧……一五七
粒……一五九
蛙……一六一
夏……一六三
元日……一六六
土鼠……一七〇
石……一七二
笑……一七四

菜……一七五
栗鼠……一七八
蔦……一八〇
蘭……一八三
赤い幻覺……一八四

びーどろ

ぐわんも

## 色彩に脅かされた心の形式

蜥蜴はそこにじつとして
空をながめてゐる。
なにごとも
おこらない雲のさへぎり深くきえてゆく。
あわただしい物音——
蜥蜴はするりにげてゆく
あとに地面はおびやかされてかがやく……

孔雀のしつぽのやうに。
霧圍氣(アトモスフィーア)はをどる炎熱のうづまき。
見えもせぬ
寫形(デッサン)の如き影に入りて心がくらむ、
――またたきに
神經は一直線につらぬく
蜥蜴のからだのするどいひかりで。



## 貧しい心

かんかんに凍つた氷路へ
轍の跡が銀帶にひかる。
路傍に馬肉屋あり
けさのさむさに
硝子戸はうすらぐもりの中に
あかさびた色をして
馬肉の片足がぶらさがる。

よくのぞきこむやうに
じつと硝子戸へよりそうて
貧しい者の兒が立つてゐる。
足袋もはかない
ふところ手をしたまま
馬肉を見て居る。



## バッタの死

もぎれるまでが藝術であつた。
なぜバッタは足をもぎれて死んでゐる？
斯樣な日がバッタに來るとは
おもひもよらぬ。
バッタはどうして死んだのだかわからぬ。
あとあしがさうももぎれて
そこへよこたはる

みるからに「ざんこくの死」にさまである。
秋が踏みとどまる
枯草もまだ餘命をたもち
灰褐色の髓をまつすぐに
生きんとする日を慾にゆらぐ。
そのそばで死んだのがバッタ
もがれた足に同情があつまる。
おお
おまへは敵にまけたのか?
自殺であつたか?

あるひは
戀の棄權者であつたらうか?
もしバッタよ、
おまへがもしもこのやうな野原で
誰にも見送られぬ死を
をへるならば、
ただかはりに僕がおまへを信じてやるよ。
おまへは
まことにおまへは「靈祖」のおくりなに
よみがへる

たつた一匹の昆蟲であるぞ。
しかしうなづけよ！
おまへが死の功績は
その足がもぎれるまでが藝術の限りであつた、
よしか
おおバッタよ……。



## 雲

雲を
しばらくながめてゐると、
しづまり、うごめき
雲は、
むかふへあかしやの樹立のあひから
とけてみえる。
いづこをさだめず

雲――ひとりだって、
ふはり、ふはり
放浪生活がはじまる。

音響さへそっと、
雲の
ほがらかにかなでて、
しんどうの
眼にながれこむささやき。



にはかにおこる。
もんをり、もんをり
かなたへこぶしのごとく、
ひろがりの驚異――
ほろびなきはてしをめぐり
いづこへゆく？

黒朱色(うるあかいろ)の變幻から
むげんをふくみてきえゆく。

# 紫の炎

おほっぴらに空氣がうごいてゆく。
たれでもしらない足もとのかげで
なんにもほかにもとめないもののやうに、
くろーばーの葉が
朝霜にうなだれて緑色にだまりこむ。
くるしみのなかにも
のっぴりかんがへこむ日のくるやうに、



うすらがれた樹木のせいぞろへ……
をどりあがるかと
おもひもよらぬ——驚異の底から
ずっとむかふへ朝日がでてゆく、
たかい
もっとたかいたかい鄕土の山脈のくづれかかりへと
その朝日がぶつかる。
おほよそ、そこにもとめられるむらさきがかつた
情熱のほのほが
いったいにおのれをとりまく。

# 廢　墟

そこへあたたかい光があたる。
あの塚穴は
まことに古いものだ。
太古の匂がするやうで
らんざつに崩れかかる。
あれらの石でさへも、
とんと



見分けがたいやうな色で、
とほる風とほる風
その塚穴へとほる風は、
まつたく、古石器時代のやうに吹いてぬける。
おや……ころぼつくる
でも住んでゐただらうか、
生暗いその土臭のおくに
光が亡靈と組んで踊りだす
……とのやうに
すごい沈默の騷々しさ……

## 源五郎

「つまり考へこんだらしい」
で、ふいと水深く沈んでいつた
が、また
ぽっくり上へでてきた。
源五郎は、
それからしばらく
水面に浮んでゐたが、



きふに、
あてどもなささうな目的にむかつて
泳ぎはじめた。
藻草のゆらぎもない
その靜まりかへつた沼にも、
源五郎が
あと脚とまへ脚との
ふん伸しと水かきぶりとで、
にはかに小波がをどり出してきた。
あてどもわからない目的に

ずんずんずんずん
と、
源五郎はまだ泳んでゆく。



## 女

あらゆる疑問にたいして、
けつして言葉をださない。
ただ――嫉みに自己をつつんで
にが笑ひをするのみだ。
石英のやうに光る眼、
びんのほぐれから
鋭敏にのぞきこみつつ

時間をだいなしに過ごす。
ものぐらいさびしみにやつれて
異性の熱望をくだく。
——そこに靈智を見たり。



## もろこし

暴風雨がとうとう過ぎた。
あの物置小屋のていたらく
白壁のはがれたあと、
そのそばに縦列をなして
ななめにかしがれる
もろこしのすがた……
すぐにも

濕土のよわさに
もちこたへぬらしく、
をれた葉に
莖の衰弱をたもちつつ、
根かぶもゆらりゆらり
もろこしのすがた……
でも、
そこに生活のつながりは
嚴かに
あの輕柔(なごやか)なふさのかげに守られつつ、



なかば外皮のやぶれて
實のあらはれ
が、ほほゑんでをる。

## 灰色い想像

樹でさへもねむる
とほく外國のはてまでも……
冬がねむる
ちかまでねむる靄のつつまり。
おっとられるやうに
こそこそと響なくせまつてゆくなかに
さむさがきゆる。



あがる煙は亡靈さながらに何處へかきえゆく。
眼がななめに浮むこころもち
かの地平線へ光がきえゆく……
人類は悲しいものなり。
いきてゆかれるあひだむだにすごされる
ほかにもとめられてなんにもえられない。
ああ……
地平線へふみとどまる弱い孤獨、
あゆまんとする
そのさきをふみつけてゆく

その力にとぼしい。
いだかれた無關心のおくそこで
灰色い煩殺(ボレドム)のうなりがきこえる
それをとらへんか、
想像は遠いのである
とても私にはおよばない。
かの地平線に光がきえゆく……
一時(いっとき)の間をつひやして重る
それら人類の功績、
むだな末路である。



ではどうしよう?
樹でさへもねむる.
とほい外國のはてまでも……
その時もがく者、
只一人あり——
それがつひに私であつた。
想像は遠いのである
こんなむだなことであつた。
樹のやうに眠らうか
それからめざめてかんがへよう!

# 流る

一室のなかに流る
日の光、
あまどのやぶれめより
いりて流る。
うすぐらいおくに、
ちりほこり……はむげんに
うろつきて



朝の日のその光脈にふるる。
ふるるとき
そこに空氣の不純はもえて
紫黒色(ベルゾ)の光をかみくだく。
わきあがるちりほこり
ひびきなき音をうらがへして
またおちる。
そこにねこんできく
瞳子(ひとみ)のするじやく
ひすてりー女のかげのながく。

# 午後の疲勞

もうまつたくつかれきつた。
一ぴきの羽蟲がつかれきつて
樫の葉のうへへとまつた。
原因を想像してゐるやうに、
いかにもその疲勞のすがたが
疲勞の原因を想像させるやうに
つかれきつて、



ふたたび
あの大宇宙の一點へむかつてゆく
その決心がない。
よわい光線のだんりょくと、
ほほほほとあがる水蒸氣の糅合(まぜあひ)とで、
いくぶん體をうごめかすけれど
それはほとんど無感覺にである。
そらにとんで
あそぶときよりも、
この疲勞がかれに對して

絶大の快調ででもあるかのやうに、
すでにねむりこむ。
その葉のうへで
やすらかにねむる
……ゆふぐれのしたで。



## 彼等の一團

トロンボーン……の莊嚴なる音律に
夏の緑は黑く沈む。
室内に物のすべては轉寢(ころね)をする。
洋燈(ランプ)の光を黄色に浴びて
うつらうつら……あざわらへる空氣の動搖に
石油のすひあがるその旋律(メロディー)のゆめごころ……。
おお醉はされて跳ねまはる歌劇(オペラ)の一團よ!

この室内の藝術の殿堂を目がけて集ひ寄れる
その羽蟲等の一團よ！
人の聲も靜まりてゆく
この舞臺の上へと彼等は自由に跳ねまはる。
風鈴は閑雅の音立てて序曲の幕が開かれる。
跳ねまはる跳ねまはる
彼等の一團は圓く垂直に斜めに
あるひは高く楕圓をゑがいて……。
沈々たる夜の目を盜んで歌劇は跳ねまはる



やがて快活なる
ポルカの舞踏樂へうつりゆく彼等の踊りは
おのれを忘れてこよひを跳ねまはる
その耽溺の華のつるへと
室内はくまなくかがやきの波をうつ。
ああ幻想曲の管絃のひびき……
悲痛は組まれてそこへたをる。
洋燈の石油がとぼしくなりゆく旋律のゆめごころ……。
それそのおどろき！

いましがたまで跳ねまはれる彼等の一大群は、
樂音のかすかになつてゆく
洋燈(ランプ)の壺の上へとこのていたらく！
いのちとほろびて指揮者もなく
歡樂の夜のみじかかりける
ああそのおとろへ——死の刹那
とぎれとぎれによこたはる。



## 卵

ちりんちりん
兒になつて鳴くときから
悲みがおこる。
すずめの五つの卵が見える。
四つにはきっと
夫婦となれる約束があらうが、
ああ、あの一つ

ただあの一つが實に悲みである。
あの殘餘(はしたた)にされる一つこそは、
生れでるからに悲みの未來を
つばさにをさめて鳴く……
ほかの兒等は嬉しみに鳴く……
が、
あの一羽となる兒の孤獨、
さびしげに鳴いて鳴いて
どこかの軒の下で。
……「交尾(バルツ)期」のくるその日……



## やつれた戀の夢

二人は
冴(さ)えたやうな
斷崖に寄り添うて、
高原の深夜に沈んでゆく無量の寂寞に
またと會はれない
心の伴奏に泣き崩れて、
人生の儚なさにこごえた。

じつと
霜を嚙みしめる鑛石の崩れ重なり
を背景に、
嘿り死ぬ二人の影を突き合せて……
ぽぷら——の
葉毎葉毎のばさつきに
ながれこむ
月光の輝きを覗きかへる、
そこに
二人は眞紅の熱情を抱きしめ乍ら



未來の方途に迷うて居た。
ああ
其の瞬き
數あるものの中に、ただ
一つの流星——
拋物線(パラボラ)をゑがいて遙かに
地上へ消えた。
わだかまりの路を
向ふに、
つんざいて

寒空へ憐れに吠えかかる
野良犬の遠吠え……が
かすかにきこえる。



## 墓

咏嘆調のかげ曳かれて
森へ入りゆく落日のそぞろ。

あゆめる人、
憂の守りに、生き死ぬわくら葉の戦ぎを眺めて、
耳うめき——沈音によろめく心の息づき、
骨のくすぶれ、靈の躓づき

そぞろそぞろに過古へ滅入りて、

「人生放棄」

うなづきの影はさびしく、

かへりみるところ、わくら葉落ちて。



## すすき

そよそよ

と、よせてくるなみかぜのほとり。

すなほにながれる

をがはのおと……

おとにそよぎもろくうなだれ

すすき、

おとなひもなき

人のこゑにくるひよるがとく、
遠音にぞよめきかかる
もろい人間情緒のほぐれ。

すすき、
さはるがごときおもひに
のむしのなきくづれ……
うすぎんいろの穂のひかりひそみて、
おぼろ月のあらはれ
うすかげをなげく。



## 螳螂

なまじひに
そこをうごきだした。
はらんだその大きいおなかを
もてあましたやうに、
はやく卵を
どこかへうみつけたい
と、あしをはやめ翅を

びりびりさせる。
そこの濕つぽいところから
乾燥(はしや)んだところへ……
もくもくと匍つてゆく
あしどりのかげへ
秋の日暮がふんのびたやうに
つきそうてゆく。



## こがらし

おち葉は眠りて
木には秘密、
風は梢の肌に抱かれ
空には無音。
あそべる雲には
高さの靜まり、
のたれる地には

深さの呻き。
おのれがここにあり。
自覺を脊負うて後へふり向けば、
うしろはむっくり立上る。
おち葉は一齊にこなたへ振向く。
ざはめき立てて「時」をかこみ
其處へこがらし踊りこむ。
おち葉をかき亂して秋をさがす。
秋をさがして
もぐりこむ。



## ささやき

夏もきた。
ほんたうに綠でかぶされる
葉蔭のみっしり、
つちべたへうつる木蔭でさへ
いろどりがふかい。
密林の葉がささやく……
ときたま小鳥等がむらがり

こずゑにさへづる。
すずしい風で
ほがらかに啼きすべる音は
夏がきたと！
自然の默移はここにぎはふ
しっとりとぬれた葉裏までへ
戀愛的(エロチック)の情である。
さびしい風がふいてゆく
くる秋までに
その秋までにわれわれは、



のびるべくのびるのである
幹と葉と梢、
それからむかふは生活が黄葉んでゆく
越年をまつばかりだ。
ぱらぱらと落葉にまかせて
これでをはりませう
どうだいみなさん
これでよろしいですか、
密林がささやく……。

## 戀

太くといき彈くまんどりん……
ちかくとほく
　　わびしうひびく。
かさなる胸底のきよくに
　　なきくづれておとろへ、
やせしこころのながめ
水藍色に空はうるほひ、



ひとりでまた彈くこころになでて
「あこがれ」
もしもこの曲がと、
彈き狂うては泣きただれ……
たうていMさんはこないの？

## さびしみ

が、
いづこへもきたる。
詩よりもさびしき夕風にいだかれて、
ばさと幹肌をおつるひびき……
馬蹄のごとき痕をそこにとどめて
きりの葉っぱが土べたへ……
このとき



あふぎみるもののさびしみ、
なんにも言ひえず
うつむきかへる。
イむところ
かの理想はひからびて
失望の渦巻ひびく。
あはれのつどひに
段落の人生をのぞく
……ところへ
きりの葉っぱがまた落ちたり。

## 黒い言葉に聽える赤い音樂

ぎよりうの葉がまだゆれてゐる……
軟觸の風にかぶせられる葉つ葉の音、
月、おぼろの情、こまやか。
とりかこまれた心がはてしなくつづく……
その内部からおこるさびしい言葉、
ほんに黒い色の單獨でかたる
さびしい中におちこんでゆく……。



見向きもしない現在のあちらで
なにかがうなる——ピッコロのやうな音、
赤いその低い響でもどる自己の中に
老衰してゆくやうな夜の輪廓、
あてどもなく
ものすごいりづむが聽える。

# 人生

秋のこほろぎ
さびしころで
疲勞の絃に耳を貸す。
何處もやつれる
胸のおくに
おち葉をかこつ灰色の音……。
月、



明暗に路はうねつて
白樺そよぐ丘の波、
びつくりかへる
美感の夢に
時をまどろむ秋の歌。

# 高原

のっぺいつちのうへへ
あかいとんぼが死んだこころもち。
滑稽詩(パロディ)をはらむるやうに
そこへ氣候がすぎてゆく秋のあさ。
くぬぎの葉はばら〳〵……とそそがれて、
素肌(すはだ)にだまる幹のぬったち——
さむさをよせてしかるる



……おちばのなかへ
よわい光がしみこんでゆく……。
日蔭地のかしがりへざく〳〵と
こはれて、
つめたい音樂のやうにしもばしらがひかる。
戀をささへてなきつかれたやうに
こどりがむかふへまつてゆく、
さびしい
そらへなぞがきこえる。

# のるう一

おお
のるうぇーの
日蔭はさびし峡谷、
氷河のかがやき……
こどりは囀り
霞霧(ニフルハイム)に、春
……崩壊のつちのうめき……



かばの葉かげ
殺風景にゆらぐ……
照る日もみえで
いんうつなれるその日のとき、
さびしさびしすかんぢねーびあ……
星は高し
よるひややかに、
灣流のひびき……
とほくとほく雪解(ゆきげ)をもるる
深谿のながれ……

「あの山越えて
あの山越えて」アルネのあこがれし
山嶺に雪まだきえぬ。
……
おお
ノラ、ノラは
つひに夫をすてていでゆきぬ。



## 朱に燃えて

うるし葉のひかり
ふりそそぐ雨のうるほひ、
低調にねむるごとく
けふの日になげく。
ひかりはみえぬ日のひかり
くもるそらのなかに
郷土の沈默をさまりて、

みみをさしいれる間もあはれに
ふりそそぐ雨のうるほひ、
人生の迷亂をなだめて
ひとところ、
このうるし葉の朱にもゆる秋の
代表的極彩色にあつまる。
そこにこの日をもとめて
直感が……ひそむ。



## 湖

ここにきたる。
ひややかなる風、
彎曲に湖べりをつたひて
いづこへかきゆる。
雜音のさびしみ
樹木ゆらぎて、
夕陽のほろび……

がまの穂かげ
さざ波にのせられてゆく。
あとに亦さざ波はうごく。

とほく西南の溪谷、
人もゆかぬ御料林の奥に
駒鳥のこゑ……かすかにきこゆ。



## 田園の心

はうきもろこしの
きばんだところへ日がおちた。
おゝ日がおちた
そのころの遠方……
しづんでゆくこゝろのどこまでも
日がさがる。

きりぎりすがないてゐる。
まるはだかの小佛等がとんでゆく
はうへ日がおちる。

ゆふやけ雲が
さかなのやうにふんのびて
いづこへゆくか？
あかい脊鰭がきれてゆく。



## 蜘蛛

下界をとほくはなれて
曲藝師のごとく、
狂人のごとく、
空想兒のごとく、
いまがいそがしい眞最中である。
營養におとろへた
あの柘榴の枝、

枝から枝へと蜘蛛は靈妙に臀をめぐらし
あとあしで絲をからげる。
からげては絲をだし
からげては絲をだし
それからそれへと、
絲が曳かれる。
もつともつと絲を曳けと
こゝろのそゝのきに蜘蛛はせっせと絲をはる。
でる絲でる絲むげんに臀からでる絲……
森羅萬象をからげつくすごとく



でるよでるよ無限にしりから絲がでる。
またゝきの中に哲理があまれて
一體一足一止一動、
いともたくみにやがて網はつくられたり。
蜘蛛はいま多角形の網の中心點に
なにごとか言はぬつぶやきに憩うてゐる。
微風に網かゆらぐ
網に蜘蛛がゆらぐ。
蜘蛛は中心點からはひだしてきたが、
なにごともおこらぬのでまた元へかへつていつた。

宇宙の纖維がたゞよふごとく
その網のゆらぐごとに、
蜘蛛は眞理の追求者のごとく
MICROCOSM のなぞにふける。
夕日暮のおとろへ
ざくろの枝の末端に、
勞作のつかれからやうやく甦つて、
ゐをもとめやうと
網からあたりを見廻しつゝ待つてゐたが、
そこはたゞたゞ



空寂の推移にもつれて、
蜘蛛のうんめいを
放任にながめてゐるばかり。

# 緑の初戀

もえる。
ほのほするどくもえる
あのわかぐさの芽ぶき、
地底のひみつをやぶりていづる
そのときの悲みとよろこび。
土のわるゝひゞき
そのまたゝきがこはれるなかに、



はづかしがる
その芽ぶき、芽ぶき
錄の初戀のもだえを
あたゝかい氣候にのぞいて、
みるその春の日
戀慕の影のその日、
ほのほたちするどくもえて
もえきれぬあこがれ……を、
處女の病弱のごとく
もだえて、

たゞもえる初戀のたゞれ
肉質もやぶるゝ
がごとく、
その春の日のもだえ
庇(かく)まふこゝろ、
みどりの初戀がもえる。



## 月

千曲川がながれる
ながれへ
うなだれて毬花(はりたんじゅ)の影、
うすらかに
こく水底にうつろふ。
「ほんたうにあなたきっと?」
「大丈夫だ心配し給ふな」

約しあふた
この堤防のなぎさよ、
この夕べも
そこに小波をよせて、
過去のなりに
低音(バス)を奏でゝ水底にかなしい。
砂、こいし
もろどもにくづれかゝる
あのきしべにも
遠き思。



あふぎみる
高く高く見えるものゝ孤獨よ、
あゝ
そのさびしいみまもり
もえぎいろの月のかがやき。

# 小豆

休耕地の初耕作、
のいばら、雜草木のきりはらはれたあとの
荒廢地、
「たんとまきやしやう」
「それがよからう」
さくをとこ、と
地主の會話にはじまり、



そこへ小豆がまかれた。
あかいや、
くろいや、きいろいや
小さい實の百、千、萬……
つちどこのねむりめざめて
嫩芽はでゝくる。
のびる、のびる——
秋になつた。

うねに豐かに莢のさゝやき、
收穫のそらにうつる。
赤いのが三斗三升四合、
黑いのが一斗九升四合、
黃色いのがじやくかん、
あせにのころこの勞働の
たまもの。



## 俤

床置に彫刻が立つ。
女の影、さびしき裸體、
女の影、さびしき裸體、
みとれつゝ憬れの焦點に
燃えあがる。
あの半球形の乳房のかげに
犯罪のごとく炎(ほのほ)が

あがつて、
それへ向はふとする者へ
するどい幻覺がもたれかゝる。
――――
そのときかんがへる。
ほんとに
女の影、さびしき裸體、
その裸體の
轉化の想像の奥深くに
かんがへきれぬことがある。



あゝ
あの戀人の
あゝ
あの戀人の
あのさびしい笑ひのかげの
あの追憶の
あの顔――を。

## 曙

イブセンの頭髪のみだれのごとく
朝燒の雲がつきあがる
あれは東の空、
となりの兒共等がおきてさわぐ
おゝ、眞赤だ
おゝあの朝燒見ろ！



## 蛋

ぴよつこん……
と、
とびあがつた。
そのちからでぴよつこん
と、とびおちた。
が、
すこしもおどろかない。

人間がゆびて
おさへつけてやらうと
ちかづけば、
もう何萬里のむかふへとんでいつてる。
人間がらくたんしてゐる
そのまたゝき、
すがたも
みえないくらゐびんせふにはねはまつて
どこかへとんだ。



## 和蘭陀苺

ああ人間、
ああ人間、この人間
この人間が最も熱烈なる
戀情を摑んで泣き叫ぶ如く、
この薄き硝子の中に
見ゆる苺、
彩りのかゞやき、

心をおしなべて燒きたゞらしむるごとく、
むくむくと、むくみて眞紅の匂ひ、
おお、戀人を抱きて捨てもせられぬ心の悶えの如くに、
奥底ににじみ入りて溶けかゝる。
水々しき色よ、まだ燃えて、
人も眠れるこの夏の眞晝日に、
わがくらむ目に見ゆる彩り、
わがきとき、又歸らざる眺めの
中に、今よ、溶けかゝる、これ等うすき
硝子器に入れられたる苺よ。



## 滅びゆく馬鈴薯の畑

一九一八年は過ぎんとする
田園史はひるがへる。
くらいむらさきの花ひらく馬鈴薯の畑、
晩春の生ひたちに始まり
晩夏にをはる短かい地底の生涯で
おもふぞんぶん、
子孫の繁殖にかたきる

まるい、ゆがむ、こぶの特徴あるそれら、
ほりとられて一つのこらずに
あのみゆる畑のみすぼらしいやせおとろへ。
地肌にみじめの一九一八年の日暮の日、
さかのぼる田園史にはたいした革命もおこらなかつたが
そこに小さい事件が挿話(エピソード)として、
あの畑の土にはわるい蟲どもがすんでゐて
馬鈴薯の葉を食ひ、
いもころの繁殖も彼等におびやかされた。
まだある——



こんねんの氣候のためであつたか
それらのうちに
ばくだいのくされものができた。
それから
わるい種子でおろされたものはとうてい
子孫の繁殖にたへられなかつたらしい。
十五六貫のとりいれがあつた
が、
ただいまのあそこ地底の疎眠(おろねむ)り
畦には靜まりかへる息(いき)があがるのみ。

## カナリ

西班牙の國のある島に
おまへの祖先がある。
かんなの花、
さびしくゆらぐ
その晩秋の夕ぐれに、
おまへは
もっともなつかしい



その雌に死にわかれてしまうた。
冬がきて
かうぢ屋の爺さんに、
おまへがうられてゆく、その
やくそくがまとまつた
そのまへのばん、
ああ……
流暢に啼く日のこない。
つひに、つひに
おまへも、雌にこがれてそのあとを追うて、

うゐにさむい蔭のくらがり
あはつぶ、
あを菜のゐばこのかげに……死んだ。



## たがやす影

とほき山嶺に雲のおだやか、
うごめきて
わたのごとくながるる。
秋はめぐる
ほがらかにめぐる。
たそがれの影はわらひのごとく
桐ばたけの潤葉に

ざはめきたちて、
墨繪のごとく
そのいろどりをこくうすく
いまたがやしゆく地面にとかす。

代赭色のにほひ、
たがやされゆく土の遺跡に
抒情をもとめて
なきやまず鳴きおとろへ
れんぞくなだらかに——こほろぎのこゑ……



たがやされゆく
土のままにまぎれて、
秋のめぐり
かしこにさくもつの豐饒がひそむ。

# 星

こんとん、と
ここへきて20+Xの生涯、
戀にほろびる詩、こころの憔悴、
……おち葉ながめて
地へ布かるるの憂苦、おのれを
せかいの自存として、
……おち葉ながめて



せめてもの勞はり。
ここへ自己人生が逆轉の光もとめる。
ああの未來への劃線が、
どこでさだまるの?
あの星の直下で?
と、うれひの顔あげて
みとれるあの森林の境界、
そこへ自己がしゃがみこんでしまいたい。

はるかより、
茫邈として己にのぞきこむ光、
こころをのがれてXをゑがく。
ここを星がみたまふ。



## 壺へおちた蟲

壺がある、
わたくしはその中へおちてしまつたのだ。
宇宙がわたくしの
苦悶へ謎をかける。
ぐるぐると
無意識に自分があの
壺のふちを廻つてあそぶとき、

そのときの終末があやまられたときの
とたん、
わたくしは
つひにこの壺へおちてしまつた。
今かんがへてゐること、
それは私にたのしいことでない。
まことにみじめなことどもである。
どうしたらば
ここから匍ひあがれやうか
と、これが第一の謎である。



六脚のほそらかをふんのばし
うるほふた羽根をたたいて、
なほそのうへ
胴體をもぢつて
しりをつきあげ
頸をふりさげてかんがへこむが、
すこしも
この謎がとけない。
ここへおちたことからして
一體ときはじめる

ことにして、
死ぬ日をよみがへらせやうとする。
さいはひにこの壺のなかには
水の一滴もない。
が、
これがまた不幸であらうか
さいはひであらうか
それさへもうわからなくなつてきた。
ここへなぜ
こんな壺をおいたのだ、



わたくしは人間を訊問しなければならない、
その罪と罰とが彼等にあるのだ。
わたくしの一命はたふとい
これをさとるわたくし、
まづこれから
かんがへ直すことにしよう！
……
この切迫のまんなかに、
大きい謎がひろげられるとき
いのちのきづなはきれていつた。

# 芽

むくみでてくる、地が
むくみでてくる。
つちの性慾、おくふかくに
水蒸氣がきこえる。
なにものか匍ひでてくる、
水蒸氣をききながらもがいて
つちの性慾、



はらませられた下で、兒等がなく。
みどりの兒等がなく。
だんだん、
あたたかみにのびてくる。
日光がとほりかかる、と
その方へますます
生ひならんでてくる。

## 體臭

死んでもはなさないよ、
ぷっくらとしたおまへのにくづき。
彈力があることおびただしい。
その中へもぐりこんで
文火(とろび)のやうな接觸に
ある興奮がもやしたい。
そっと耳をかし給へ、僕に



「……」
わかつたらう?!
そこに處女(ヴァジン)の新生があるんだ。
わかつたらう?!
そこに異性の要求があるんだ。
もっとこっちへより給へ、
僕がこの高尚な鼻覺をつきいれて、
いま一ぺん
その中へもぐりこんで
軟觸にあこがれてみたいから……。

## ぴあの

微動のひそみ、樂にをどる。
にほひの律（リツム）、まつはる
「秋の水草」、
この伊太利亞音樂は濕ひの空氣に媚びりゝ響く。
しなやかなる
指におびかれてそこにひびきの
鍵盤にするどく、



すこぶる澄んで低く高く
高く低く律（リツム）なびいて、
聽ける者の耳から眼、眼から耳へとそそり立つ。
うづに卷かれてほどかるる如く
彩りが空氣にさわがしい。
またも聽きたまへ
「秋の水草」、
かくも短かい哀れのいのち
にごりの沼に輕ううかびて、
みにくき花咲くこともあり。

泥土をはるかにあてどなく
かしこここ、
ここかしこと
なみめぐるままにゆく。
自由のおのれ
おのれの自由、
夕日影のなぎさに醉うて
かれ葉やぶれの纖維のままで……
樂師の唱ふ高情の中に
美の彈力はたそがれてゆく。



## 甦生の惱み

椎の樹もある。
じゆくした實が若干おちた。
ころりころり
ころり……
めいめい自我の行動で
ころがるところまでころがつてそこにとどまる。
そこに、椎實(しひだんぼ)の生活が開始される。

あの一つの椎實をごらん、
あんなかたい巨石のうへへおちてしまつた。
そこに、水氣もない、土もない
が、椎實はどうして芽をだし、
それから親木のやうになるのだらう？
まづ殼をぬけでて、
それから生活が開始されるだらうから、
しばらく
だまりこんで見てゐよう！



## 秋

こかげふく風はさびしく、
あきの日をかすめて
うろたへし、野づらの夕まぐれ
すだきかかれる蟲のこゑ、
かくだんなる哀れさに
こたへもえず、
おのれより喘ぐ。

うろたへし、野づらの夕まぐれ
だまるかしこ、
おしなべて人生の考へおこる。

なもなきくさ葉のするに
露はやどる。
うろたへし、野づらの夕まぐれ
きえかかれる薄影に變律ひびき、
くらく邪淫のめぐる。



露はやどる。
かかるときも眠りををさめず
すべてをあつめて、
はてしなく宇宙にひかる。

# 瓶　踊

一人は
あるいろの衣裳きて、
一人は
まっかの衣裳きて、
一人は
ももいろの衣裳きて
をどる。



あふぎをふりかざしておどる。
なんとかぶしの俗謠がはじまり
三人いちれつをなして
をどる。

べーぱーにをどる。
ほんの小さいちちいろのおしろい瓶の
商標のはり繪の彼女等であります。

をどる、をどる三人をどる。

机の上におかれてをどる。
まことにをどる
びんからはなれず、
たふとくをどる
人にこびず、
こゑをひそめて
上手にをどる
をどる、をどる
をどる。
をどりををどる



ほほゑみをかはして……。
おいらんどもが
三人をどる、
まっかの衣裳がまん中で、
うしろがももいろ
まへがあゐいろ
たれが一番よくをどる？
たったり、すくんだり
手をのべ、足をまげ
まへへ、うしろへ

くびをななめに
小意氣にわらふ。

人や時間にこうでいなく
正直にをどる、
三人をどる
藝術のため、おいらんをどる。

びんがころがつても、さかさまになつても
をどるために彼女等をどる。



びんをにげいで
そこにをどる。

おいらんどもはえらいもの
びんをはなれてをどらない。
おいらんどもはえらいもの
ペーぱーの上でをどつてゐる。
藝術のため、びんのため
をどりををどる
ゐにをどる。

## 螢

くさむらのひそみ
光の無響
へとただよひ……
ながれの深さへしづむ
もの暗い凉味の彩り、青玉色にうかぶ
ぎらぎらぎらぎら
玉纏く餘音……



## 芹

はむしどものつどひ、
音樂を小脚にけちらして
そちらへとびあがる。
……
ゆらり、ゆらり
せりの葉かげくさむら。
つかれた羽蟲ども、

せりのくさむらに樂をひそめて
しばらくの息ひ、
夕日はほろびかかる。
……
やがて、くらがりのどん幕さがる——
はむしどもは何處へゆく？
をさまりのかげも見えぬ
をがはべりの芹かげのうつろひ。
無味の空氣、たゆげのにほひ
西、けいしや地の眞ほろび。



## 勞働

巣箱のぐるりに
ぶづぶづぶづ……
かぞへきれぬ唸りのあつまり
たいした蜜蜂だ。
ぶづぶづぶづ……
花蜜を求めにせはしく

空へまひあがつてゆくのもある。
巣箱へかへつてくるのもある。

向日葵の大きい花の
おもたげに咲く日の曇り、
寸分もゆるみないつとめに、
ぶづぶづぶづ……



## 煙

宇宙がしーんと聽いてゐる。
これから哲理がはじまる
線香の煙から。
一體、あれはなんです?
しーんとしてゐる、机の上に
燃えてゆく線香なり。
宇宙の凡ての系統は

この一夜の線香にうなだれる。
宇宙は踊り出す
暗い空氣が無意識にとんできて
線香に耳語く。
まだ深夜は點れない
しーんと其處が凝視される
中で踊るのだ。
あの細つこい線香の直立、
いつまで凝視をほしいままにしても
消えゆくまでは



そこが森嚴なる環境である。
かかる机の上、
不可思議なる聽覺に踊る。
ひびかぬ螺旋のごとく
見る者の狂想の色にまぎれて
たくみに空氣を卷く。
卷かれた空氣は宇宙の環境である。
おどろいたよ線香の煙！
あああがつてゆく。

# 七葉樹

樹がていていと
しげつてをる。
さるだひこ神社のけいだい、
それらの樹だちのなかに
たった一ぽん、
おほきい七葉樹がある。
ひろい葉と葉のざはゆく蔭から、



じゅくしたる
實が一っきり——ぽっつりおつてきた。
地音にかすめられて
そこへかけあつまつた感覺、
つひに
わたくしが拾うてしまつた。
ほかの小供等はぼんやり
ひろはれた實ばかりを見つめてをる。
……
……

……

……

その實が庭へまかれた。
いま十六七年の年代を
過古に葉がへるこのふといみき。



へ

實に眞面目であつた。
が、
とうとうでてしまつた。
遠慮したやうなその音は
どこかへもぐりこんで
空氣をそそのかした。
ものさびしい

その消滅のうしろへ
どつと、
諧謔のほのほが燃えあがる……
すぐそばて嗅覺が
わらひだした。



## たそがれ

さびれたやうな
濁音で
よしきりがないてゐる。
疲れかかつたやうな
落日のむかふへ
洪水がひけてゆく。
さわぎも

たてず株根がゆらぐ
葭の葉のうなだれ——
濁流に醉つた
その葉蔭でまたも
よしきりがなく。

ぐわぐわじ
ぐわぐわじぎやぎやぎやぎやぎ……



## 梟

ふくろふがなく。
もの凄いほど暗いおくで
大木のうろへ
さびしい晩暮のかぜがふく。

鐘楼はしづんで
鐘の音をさまり、

あたりは
荒凉としてでかだんを覗く……
そこにふくろがないてゐる。



## 骨

人の頭ぐらゐの穴がある。
なかを今一ぺんよく見なほした。
……なにものか、
灰白色のござる
らしいやうに、空氣がにほうてくる
にほうてくる。
うたがふやうに、こなたを見つめたるまま

必ず死ぬるもの、
との正體だけはやうやくわかつた。
くぼみおちたるまなこのあと、
齒のおそろしくむきだせる、
くづれもしない骨ぐみのまま
の骨。

頭蓋骨、足骨、軀幹骨……
みると、みると、よくみると
だんだん古めかし。



ながい年のながい年のながい
この洞窟のすまひ、
ただいまは
つひに、——「あんらくの死」を
ここに……。

くうきの荒凉たるただよひ
奥にこもり、
たんにこの骨のみをまもる。

# 株式會社

そこをとほるとき
七萬圓もかゝつたあの建物、
あの中に事務をとる人々が
てんで私にわからない。
それに、
わたくしが土地をかふについて
金をかしてください



と懇願したけれども、
あの七萬圓の建物がぜいたくすぎるやうに、
彼等からは
わたくしのかうした懇願にたいして、
それがいかにも
ぜいたくにおもはれたらしく
金がかされなかつた。
株式會社、
その建物をみあげてとほるとき……。

## 蛆

それ世界があるよ
あの糞だめの中にある。
うようよ……
おしあひ、へしあひ蛆蟲等が
糞尿のゆらぎに耐へ
きれぬやうに、
そこにも生活がある。



蛆蟲等は裸體そのまゝで
もがくよ、もがく
そこに技術がある。
もがいては糞だめのふちを
われさきへと
登らうとして、柔弱の
からだをむいむいとおくつてゆくが、
うへゝのぼりきらない
ところで、
どんこり底のはうへ落ちかへつてしまふ。

しんばう、しんばう
づよく反覆してはみるが、
到頭だめで
もとの生活へかへる。
蛆蟲等！
ほんとに馬鹿げたおこなひ、
この炎暑さへわすれて
はひまはる
徒勞のもがき。



## 葉

凋落しつつばらばらばら……
のっぺいの傾斜地へ葉が散らかつてゆく。
　ちゅんつうく、ちゅんつうく
　つうつう、　ちゅんつう
　ちゅんつうく、
四十雀が鋭い音で樹林をゆるがす。
また落ちかゝる、ばらばら。ばらばら

乾いた葉が枝から枝からと、
その鳥の單調に氣候が動かされつゝ
韻律がくづれる。

落葉ががさこそと地へをさまる——褐色の沈默へ、
そこへ夕日が抑揚の光線で彈奏する。
落葉は踊り
わびし氣に秋が笑うて、
滅亡におびかれてゆく。……一葉一葉の重なりに。



## 霧

崇高なる人類の
　　眠り治めて、
　ゆるやかに
仙郷にたどり入る如く
　　かの麓野に霧は湧く。
　　にぶき、直感に亡びゆく響き。
　　むしのこゑかすかなり。

峻烈なる山脈を
彎曲に鈍角にぼかしかゝりて、
濃くうすく彩り
悠々と宇宙の皮膚を蔽うて、
濕れる音も無く霧は湧く。
　　ぞくぞくと
　樹てる落葉松の緣悲みに曳かれて
　又霧にむせび隱れる。
　朝の瞑目、照る日の前に
　高原のゝずむは跳る。



## 粒

幾萬億兆……
籾の粒、
粒と粒とが互にみつせつし合うて莚のうへへ
よわらかな秋の日をあびて、
淡黃に彩る粒、
粒へぎら〳〵個性がかがやく。
日がながるる

粒から粒へ、
形と色、おなじに見えて
かぞへきれぬ。
うろたへたる日を覗きこむやうに、
鶏がとんできて
粒から粒へと
だん〳〵個性を啄みはじめてゆく。
むかふに
老人がぼんやり立つてゐる。



## 蛙

はたけを鋤いてゐると
蛙がなく。
夕日がほろびやうとする
またたきへも、
あたたかの春が軋られて
談合されつつあるかのやうに、
かすかの蠢めきの發散からおしあふ

土塊のにほひ、

まだなくらしい

と、

働くのをやめてぼんやり嘿つた。

……

どんなに聽かうとまつてゐても

もうなかない。



## 夏

地球でさへもとろぐやうに

どこもかしこもこのいきれ——

夏

まつさかりにかけまはつて、

すべての物象を興奮させるのみ。

綠葉はつかれきつて

水氣を待つべくぞよめきかかる。

大きい石のすぐそばで
蟻どもがゐにありついた。
ひからびた蚯蚓の死骸——
ひつぱつてゆかれる影はさびしく
この光線の下をいづこまで……
日蔭地へもいきれの暴威が
突入して、
密生し合ふたあの苔類の生活も
息をとだえる。
きふに



あぶらぜみがなきだす。と
ながめるからに
いとも急激な雲のちらがり——
やがて
ぼうつと影もみえない。
沼に水がひからび
たぬきももうかびをほろんで
水蟲どもは
どこかへいつた。

## 元　日

高い山から、
あさ日をどりでて、
永世不滅のちくまのながれ
北國へゆく。

沙汀のあたり
あさ日をあびてかがやき



ぷらちなのしとねのごとく、
水音……
ひくくかなでて
さざなみのりずむに默しかへる。

日はだんだん登つてゆく。
河原の石ころは
のこる雲の包容にとろけて、
寶玉のやうにひかる。

あさま山の噴煙は
たいしや色のことほぎ、
やつが嶽はぎぎとして峡谷のむらさきは。
雪をふくむで峰にむせぶ。
樹林は、
みきはばを日光へ暴露しつつ
みどりの新生を
木心にものがたる。
さびしき村村……



電柱が立つ。
あかしや並木の音
ぎんいろめかす
雲だんだらのさへぎり。
ないてゆく鶺鴒のはつごゑ、
……
……。

# 土鼠

むっくら、むっくら土が動いてくる。
凍ゆる土が光に溫められて
内部から外部へ崩れかかる。
むっくら動いて
固い土がむっくら動いてくる。
また音も無くてむっくら
むっくら、むっくら動いてくる。



見えない生活が、
動いて重なり
土が農具でよりも技巧的に易られてゆく。
あの萬里の長城のやうに續いてゆくところ。

# 石

こどもらのいたづら、
てつだう線路へ石をならべる。
ひろひてはならべ、ひろいてはならべ
だんだんならべてゆく。
かたい石がそのままに置かれる。

ぴいい



するどいひびき、
汽車ががうがうとやつてくる。
びっくり、小供等はにげだした。

「どうした?」
くろげむりの中にとどまる人々のこゑ、
石はまだそのままに
おほきいものをとどめて、
そこにだまりこむ。

## 笑

ホホホホホホ……

と笑ふ。

ほほをこきさがつて靨のあたりへ
十七歳の女らしさ
ぬくらあたたかいふとももの――へ
めぐりゆくまっかなはづかしみをそらして、
ほちゃんとおちこむ底に諧謔がある。



## 栞

ふやふや……
と、
やはらかい息があがる。
おとなしい
朝のこころもち低頭れて、
われらはものがたる
ここへ生えて